

過疎地における廃校利用による地域おこしとコミュニティ形成について

著者名(日)	堀 啓二
雑誌名	共立女子大学・共立女子短期大学総合文化研究所紀要
巻	19
号	3
ページ	31-52
発行年	2013-02
URL	http://id.nii.ac.jp/1087/00002922/



過疎地における廃校利用による地域おこし とコミュニティ形成について

堀 啓二

第1章 研究の目的・方法

1-1 研究の目的

新潟県十日町市を中心とする越後妻有地区では、3年毎に地区全体を発表の場所として妻有アートトリエンナーレというアートフェスティバルが行われている。このフェスティバルは、過疎化が進む地方都市や村落の持っている、豊かな環境資源を活かしつつ、その中にアートを展開することで、豊かな環境を再認識するとともに、地域外の人たちとの交流を深め、かつ、地域の良さを積極的に伝えて行く地域おこしの役目を果たしてきた。2012年は開催年に当たり5回目を迎え、地元の方々にも定着し、ますます活動は広がり成果を上げている。

我々の研究室も東京電機大学とともに2007年から小出地域の空家プロジェクトに参加し、実際に村に滞在し村の人達とともに作品をつくってきた。村の人達との良好な関わりの中、一定の成果は得られてきた。しかし、少子高齢化もあり過疎化の波は止まらない。全国の小学校同様、小出地区の小学校も最後は学生2人となり、隣町に吸収合併され昨年廃校となった。

小学校は、誰にとっても育った場であり、その人たちの原風景であり、その地域のコミュニティの中心の場である。廃校になった昨年からは、村の伝統の太鼓の練習や毎年6月に地域の運動会で使用されるなど、今でも村の財産となっている。また、施設は新しく耐震上も優れた建物である。地域の方々は、使い続け、将来は学校として復活することを望んでいる。

本研究の目的は、このような地域の状況の中、全国の廃校利用の実例を調査分析しその使用方法、改修方法を探り、今回のコンバージョン計画に活かすとともに、実際に現地の方々にはイヤリングやプレゼンテーションを行い、現地の方々と一緒に、再利用の方法を提案し廃校利用の可能性を探ることにある。

なお、この研究は、学生（堀ゼミナール生）とともに現地に入り、サーベイ、ヒヤリング等を行い、計画案を作成する。実際に住民の方々にプレゼンテーションする作業は教育的効果も大きい。

1-2 研究の方法

本研究は大きく2つの方法で行った。

一つは事前調査である。事前調査は、文献調査と実際にコンバージョンされた小学校の視察を行う。この調査から廃校がどのような用途に利用され、どのような改修が行われているかを導き出した。

一つは現地サーベイを基にした計画案の作成と地域の人たちへのプレゼンテーションである。プ

レゼンテーションの中で行われる意見交換から地域の人たちの意見を吸い上げ計画案に反映しブラッシュアップし現時点での最適な計画案を作成し、最終プレゼンテーションを行った。

第2章 事前調査—1 文献調査

少子高齢化に伴い日本全国で小学校の統廃合が進んでいる。文部科学省の「廃校施設等活用状況実態調査」(平成22年5月1日現在)によれば、平成14年度から平成21年度に廃校になった公立学校数は5,796校である。

その内、現存するのは3,310校で、何らかの活用が図られているのは2,295校(69.3%)である。廃校となった学校はコンバージョンが行われ、様々な用途に活用され使い続けられている。

一方、現在活用されていないものは1,015校(30.7%)ある。その内794校については利用予定がなく、その理由として、活用を検討しているものの地域等からの要望がない(44.8%)、活用方法がわからない(9.2%)こと等があげられている。

このことから、その施設を利用する現地の住民の方からの意見や要望はとても重要であることがわかる。

現状でも、日本全国で廃校になった小中学校の利用が考えられ、工夫され実施されている。コンバージョン事例を文献中心に調査した結果下記の様々な利用があった。

■オフィス・工場など

ペレット(木質燃料)製造工場、生ハム工場、ミネラルウォータープラント、カフェ・ウッドボックス展示・販売、泡盛・古酒製造企業研修施設、デザイン関連創業支援施設(事例1東京都台東区、旧小島小学校—台東デザイナーズビレッジ)、研究所、デザイン関連企業のオフィス(事例2東京都世田谷区、旧池尻中学校—IKEJIRI INSTITUTE OF DESIGN 世田谷ものづくり学校)など

■児童・高齢者などにための福祉施設

特別養護老人ホーム・高齢者在宅サービスセンター・子供中高生プラザの複合施設(事例3東京都港区、旧氷川小学校—サン・サン赤坂)、病院、シルバー人材センター、保育所、地域ケアプラザ・コミュニティハウス・インターナショナルスクールなど

■アート創造拠点などの文化施設

美術館(事例4栃木県那須郡、旧小口小学校—もうひとつの美術館)、美術館(事例5新潟県十日町市、旧真田小学校—絵本と木の実の美術館)、文化芸術の拠点施設(事例6東京都千代田区、旧練成中学校—3331Arts Chiyoda)、(事例7京都市京都市、旧明倫小学校—京都芸術センター)、アート創造拠点施設、芸能文化拠点施設など

■体験学習施設・宿泊施設など

体験学習型エコビレッジ (事例8 神奈川県相模原市, 旧篠原小学校-篠原センター), 体験型観光施設 (事例9 茨城県石岡市, 旧あさひ里山小学校-朝日里山学校), 自然体験・宿泊施設, 農業・林業体験・宿泊研修施設, 体験型 職人工房, IターンUターン者向け公営住宅, 体験交流型グリーンツーリズム施設など

■大学・専門学校などの教育施設

通信制・単位制高等学校, 介護福祉養成などの専門学校, 大学サテライトキャンパス, 図書館など

■特産品販売・加工施設など

地産野菜などの加工販売, 農家レストラン・農産物等直売所・体験型交流施設, 地域名産品の販売・体験コーナーなど

上記の様々な用途変更の中でも, アート創造拠点などの文化施設, 体験学習施設・宿泊施設の事例が多かった。これは, コンバージョンされた後の用途が地域の人々にわかりやすいと共に, 利用者が参加しやすいという点が大きい。また, 基本現状の設備や空間をそのまま使用できるというコスト的なメリットが寄与していると思われる。それに対して, 高齢者が増えこれからの縮小して行く都市や町, 村の中で, 児童・高齢者などにための福祉施設はとても重要でかつ必要とされる機能であるが, 改修や運営にはとても費用がかかるというデメリットがある。しかし, 一から建築するコストを考えれば, 十分可能なコンバージョンである。

第3章 事前調査—2 事前視察調査

事前の文献調査の中から, 特徴的な事例を9つ抽出し実際に視察を行い, 空間の改修方法, 活用方法, 運営について調査した。

■事例1 旧小島小学校 台東デザイナーズビレッジ 東京都台東区小島

「台東区が運営する企業したてのデザイナーを対象にした操業支援事業オフィス, アトリエとして貸し出す」

台東区は昔から個人でファッション (洋服) やデザイン (雑貨) などを商売とする人が多かった。このようなファッションやデザインの分野では, 実力次第で大きく成長することが可能とはいえ, 個人や小さな会社ではビジネスとして成功するには, 大変な努力や周囲の支援が必要である。デザイナーズビレッジは, 審査に受かった若手のデザイナー, クリエイター19組が入居し, ビジネス

育成に日々努力し、自分のビジネスを成長させるための場である。若手育成のため3年の更新制である。

デザイナーズビレッジでは、下記のハード・ソフト・ネットワークのシステムにより、起業のリスクを低減させ、事業としての成長を支援している。

1) ハード（施設）

低廉な家賃でオフィスが利用可能であるとともに、作品制作・展示に使用可能な工房やギャラリーなどの共用スペースも利用可能。

2) ソフト（支援・指導）

インキュベーションマネージャー（通称村長）によるマーケティングアドバイスや、台東区産業振興課による支援がある。

地元金融機関などによる支援メニューを活用可能。

3) ネットワーク

入居しているデザイナー同士はもちろんのこと、地元産業界・マスコミ・流通などとのネットワークが構築され、その中から新たなビジネスチャンスが生まれている。

■事例2 旧池尻中学校 IKEJIRI INSTITUTE OF DESIGN—世田谷ものづくり学校 東京都世田谷区池尻

「デザイン・建築・映像・食・アート・ファッション等、様々な分野のクリエイターに教室を開放し、ワーキングスペースとして機能させた廃校跡地再生プロジェクト」

この建物は“R”をキーワードに、既存の建物、しかも学校というパブリックな性格を持つ建物を Reuse, Recycle し、その潜在的可能性を、地域に開かれたコミュニティの場として Recreate した上で、さらにそこから新たな価値を Renovation することを目的として設立された。

次世代の学び舎を提案ということから、施設内は展示、撮影、イベントなど様々な使い方ができる【マルチスペース】をはじめ、試写室・木工室の他多くのパブリックスペースを開放し、多種多様なプログラムが実施されている。校舎を世田谷区から賃借し、SOHO用途にコンバージョンした上で、映像・建築・家具関係などの個人事業者を誘致・集積し、デザインやものづくりの拠点として再生している。

入った企業はその教室を自由に変更できる点が特徴である。そのまま教室にパーティションのみを設置する場合の他、塗り替えも可能でクリエイターの居場所としての独創性を表現することができる。

入居するクリエイターの新規創業支援を行う他、カフェ、ギャラリー、ものづくりに関するワークショップ・プログラムなど、地域住民とのコミュニティづくりに積極的な姿勢が、地域の中で常に新しく近い存在になり地域の活性化に役立ちように感じた。

このように IID（施設名称略）は、「学ぶ」「遊ぶ」「働く」ことを通じて「人」や「地域産業」との関わり合いをより良いものとする取り組みを行っている。

■事例3 旧氷川小学校 サン・サン赤坂 東京都港区赤坂

「高齢者と子供たちの世代を超えた交流を推進する高齢者福祉施設と児童厚生施設との複合施設」
地域住民からの要望により特別養護老人ホームとして計画され、それに併設して児童館を設けた複合施設である。建物の特徴としては小学校のコンバートに加え、校庭部分に増築して複合施設とした点、木々を残し屋上緑化をするなど環境にも積極的な点である。

特に2つの用途を繋ぐ共有のスペースはなく、頻繁に開かれる行事により福祉施設と児童館の交流が生まれている。バルコニーから中庭で遊ぶ子供達の様子を見ることができるが、施設間の行き来には職員の付き添いが必要で、常に開かれた交流とまではいかないが、職員の努力により複合施設としての試みが色々と見られる施設である。

しかし、現存する体育館の用途は変わらず、区民への一般的な貸し出しは行わず基本的に施設利用者が使用している。これは防犯等の理由からであるが、施設の内容から考えて地域への開放というオープンな考え方は難しいようだ。

児童館の特徴としては都心における中・高校生のための居場所作りを目指している点である。図書スペースや音楽スタジオなど充実した場であり、土日も夜8時まで開放されている。もちろん小学生の利用もあり、体育館や廊下を駆け回る元気な姿も見られた。

■事例4 旧小口小学校 もうひとつの美術館 栃木県那須郡

「知的障害者の生み出す美術作品を常設展示する美術館」

明治に建てられた木造校舎を建築家梶原紀子さんが借り受け、知的障害者の方の作品を展示する「もうひとつの美術館」としてコンバージョンした。築100年以上の時を過ごした県内最後と言われる木造の小学校を遺したいという想いと、美術作品のための美術館でなく、主に障害を持つ人達の規制の枠にとらわれない自由な精神から生まれる作品の素晴らしさを伝えて行きたいという想いが形となった建築である。

美術館スペースの他、地域に人たちの思い出が残る学校の机や椅子・棚などを再利用して作られたカフェもあり、音楽ライブなどのイベントも開かれている。カフェに併設されたショップでは、障害者の人達によるアート作品・食器・雑貨・アート本などを扱っている。入館料に加え、これらの利益で運営を行っているがとても厳しく、多くのボランティアの支えなしには運営は成り立たないのが現状である。

近年見られなくなっている日本伝統の木造建築の校舎自体の魅力がとても大きい。通り抜ける風、スキマからはいる光、歩くときしむ床は松を使っていて丈夫で美しい。その空間は経験がなくとも懐かしさを醸し出し、その雰囲気は作品をより際立たせていた。

この小学校は当時、地域の人達が財を持ち寄り土地を提供して地域の子供達のためにつくられたものであり、その役割を終えた空間は主に障害を持つ人達と社会を繋ぐアート空間として活用されている。たくさんの人達の想いが詰まった建物の記憶とともに、次の時代へ何が大切かを教えてく

れる場だった。

■事例5 旧真田小学校 絵本と木の実の美術館 新潟県十日町市

「学校全体が一つのストーリーで構成された空間絵本美術館」

妻有アートトリエンナーレに作品の一つとして2009年に絵本作家である田島征三氏によって制作された。実際にそこで生活した子供達にヒアリングを行い、学校にはよく出てくる「おばけ」を題材として当時の在校生3人が主人公のストーリーを構成、村の人たちと共に創られた協働作品である。

この美術館は、すり鉢の地形の底にあることから名付けられた「鉢集落」にある。鉢集落は美味しいお米、野菜そして住む人の笑顔があるとても豊かな土地で、互いに助け合いながら暮らし、人情深く、集落を明るくするエネルギーに満ちている。年間を通して様々なイベントが行われ、鉢集落を訪れる人が年々増えている。

■事例6 旧練成中学校 3331Arts Chiyoda 東京都千代田区外神田

「アーティストやクリエイターたちがそれぞれの表現を自由に発信する大型のアートスペース」

2005年統合により神田一ツ橋中学校になった練成中学校を改修・再利用した。千代田区芸術プランの重点プロジェクトとして始まり、たくさんのイベントや展覧会を行ない、様々な表現を発信する3331Arts Chiyodaは、東京だけでなく日本各地や東アジアをはじめとする世界中を繋ぐ「新しいアートの拠点」となることを目指して設立された。そしてこの場所が、地域に根付く文化力の創造性を促し、本質的な『生活の質』を高める核心的な場所となることも掲げている。

各教室をアーティストやアート関連団体のアトリエ/展示室として活用。公園と一体となった半層上がった1階のカフェは持ち込みもOKで近所の奥様方の憩いの場として利用していたり、オフィスワーカーの間合わせや打ち合わせ場所になっていたり、駅にも近く都心の良い休憩スポットになっていた。カフェは23時まで営業、自然と人が集まる空間であった。

単なるギャラリースペースにとどまることなく、人と地域と世界と繋がるものを創造して行く発展の場になっているのが特徴であった。

■事例7 旧明倫小学校 京都芸術センター 京都府京都市

明倫小学校は、明治の初めに地域の人達自らの手でつくられた地域のシンボルとも言える存在だった。1993年に閉校、1996年「学校跡地利用審議会」・「京都市芸術文化振興計画」において、「芸術文化交流センター」としての活用計画が策定され、2000年一部改装・増築の上京都市の中心部にある芸術振興の拠点施設「京都芸術センター」として開館された。

制作室、ギャラリー、講堂、大広間、フリースペース、図書室、情報コーナー、茶室、カフェ(前田珈琲明倫店)、談話室、ショップなどで構成されている。

財団法人京都市芸術文化協会が委託され運営、芸術活動支援、芸術に関する情報の収集・発信、

「アーティスト・イン・レジデンスプログラム」の実施、芸術家と市民の交流促進などを行っている。

2008年、西館・北館・正面及び塀が国の登録有形文化財に登録され、町の景観を維持しつつ、町のシンボルとなっている。

■事例8 旧篠原小学校 篠原センター 神奈川県相模原市

「地域活性化を目的としたNPO法人『篠原の里』による子育て事業を中心とした宿泊体験施設」
集落の中心施設であった篠原小学校が、廃校となり「篠原の里」設置準備委員会を2002年に設置し、対応検討の末に里山の伝統や文化・環境を守りながら、都市住民との体験交流を深め、住民の生きがいのある魅力的な地域を創造するために「篠原の里」づくりが構想された。

施設運営スタッフの中には都市から移住してきた人もいる。施設は、食堂、子供育児（児童保育、学童のような小学生の放課後の活動の場）、都市住民の体験交流のための研修・宿泊サービスなどの機能を果たしている。また、集落の人たちの活動の場であり憩いの場としての機能と共に、都市からの外来者と集落の人たちとの交流の場としての機能を果たしつつある。そのため施設には、自然環境との共生をテーマとして、土間空間、土の壁、地元産の樹木の活用（食堂のテーブル、棚、宿泊室の床材など）、微生物による自己完結型の完全汚水浄化システム、ペレットストーブの設置等の建築的工夫が施されている。

見学した日はちょうど祭りが開かれていて、地域住民の方の準備に賑わう姿が見て取れた。宿泊施設にも団体客が泊まっていて、施設は盛んに利用されているようだった。

「篠原の里」の試みは、まだ明確な形でのエコビレッジにはなっていないが、自然や農的な暮らしの体験交流、学びをテーマとした、体験学習型エコビレッジの方向性で動き始めていると言える。13万5千の集落コミュニティが残っている日本は、世界的に貴重な農的暮らしが維持されてきた国である。その集落環境の伝統的な良さの継承と再生を、地元住民と都市住民の協働で実施するという試みが、コンバージョンの一つの解答であるように思われた。

■事例9 旧朝日小学校 体験型学校施設朝日里山学校 茨城県石岡市芝打

「里山の自然を活かし、林業、農業、食などを体験する交流・体験型観光施設」

当初は市の施設として計画され、市の予算で管理運営されてきた。年に市を退職した人たちが中心となって設立されたNPO法人に管理運営が引き継がれた。そこで一番問題となったのが、予算の関係上若い人が雇えないことだそうだ。このような施設には若い人の考えや力が必要だという意見だった。

都心では、個人や小さな企業の使用が主で、その活動が外に滲み出る事やカフェなどの外に開いた共用スペースの設置が地域との交流を促進している事例が多かった。これは、都心はオフィスの賃貸料が高いため、一人ではなかなか手に入らない共用部を持つ施設は、需要が多いからだと思わ

れる。また、集まることで様々な意見交換ができ自分達の発展に繋がるためだと思われる。

地方では、その土地の環境を生かし、外から人を呼び込むとともに、地域の交流を促進し活性化を図ろうという事例が多かった。

第4章 現地サーベイ

4-1 現地サーベイ1 環境等の調査

夏8月と豪雪の2月現地の環境調査を行った。

・自然が豊かな恵みをもたらす春・夏・秋

夏及び中間期はとても過ごしやすい環境ではある。山、川、虫、動植物と自然が豊かであり、日本有数の米どころであり農作物も豊富である。しかし、日本全国同様の状況ではあるが、少子高齢化のためそれらの豊かな資源を引き継ぐ人材がいないのが一番の悩みである。自然と食は人間の源であり、必要不可欠なものである。また、少子化による廃校、家を継ぐ若者がいないための廃屋など、有効な産業資源が手つかずのまま朽ちていってしまうことも問題である。それらを有効に利用し、次世代に引き継ぐソフトとハードが望まれている。

・雪に閉ざされる厳しい冬

冬の豪雪は2階家が完全埋まってしまい、ひとの生活や活動を閉じ込めてしまうとても過酷な環境であった。その中でもこの地区がある十日町市は、妻有アトリエンナーレ関連イベント（冬の林間学校、冬の運動会、雪を利用したアートイベント）やスキー場を利用したアートイベントが冬も積極的に行われ活性化をはかっている。これらの他、雪も考えようによっては有効な資源ともいえる。自然の冷蔵庫としての雪室。雪室にためた雪を夏の冷房の熱源に使用。利雪も積極的に考える必要がある。また、雪の問題は雪下ろしである。筆者も実体験したが、雪下ろしは危険で重労働で、高齢者には過酷な作業であり、毎年事故の報道も多い。ある地域では、大学の研修施設があり、毎冬学生がボランティアで雪下ろしをしている地域もある。このような拠点を創りサポートするハードとソフトも重要である。

4-2 現地サーベイ2 ヒアリング等の調査

現地での住民の方々への直接のヒアリングとアンケートを行い、実際の要望等を把握しまとめた。実際に行ったアンケートの内容は以下の通りであり、選択式と記述式で答えてもらった。

- 1) 住んでいる地域の特徴や過疎化問題について
- 2) 住んでいる地域での生活や地域活動について
- 3) 住んでいる地域の将来について
- 4) 大地の芸術祭について

・結果の概要

この地域での生活にはある程度満足しているという結果であった。30年～60年と住まい続け、

地域内の繋がりは強く感じるが、高齢化を強く感じている。仕事の不足は感じないが、若い次の世代の仕事の担い手が不足している。このような将来への不安を心配している人が大半を占めた。

具体的には、豪雪や交通の問題の解決、農業の共同化、若者が喜んで一次産業で生きていける環境、若者の住める環境、清津峡を中心とした観光資源の発信と活用等が上げられ、現在の生活を守りつつ、豊かにしたいという意見が多数あった。旧清津峡小学校の活用としては、地域外の人との交流の場所としてはどうか。例えば体験型学習施設として、都会の子供や大人に農業や自然を体験してもらい、地域と交流を深めてもらうのはどうかという意見があった。

大地の芸術祭については、開催当初より印象は良くなったという意見が多くなり、外部からの来場者が増えたのは歓迎されている。しかし、芸術祭により地域が活性化したかについては、以前と変わらないという意見が大半を占めた。芸術祭への協力は望んでいる人が大半なので、さらなる地域の方々への発信と、地域の方々とのコラボレーションが重要である。

第5章 計画案の作成及びプレゼンテーション

事前調査、現地サーベイ及びヒヤリングの結果を活かし、3案使い方の計画案を作成した。それを基に現地の方々にはプレゼンテーションを行い、計画案に対する意見、要望を確認した。

■案1 地域サポート施設 清津の里

小学校を地域サポートの拠点としつつ、様々な地域の方々を呼び集める多機能センター。

・地域サポート施設

健康相談、アスレック等健康支援施設、子育て支援、伝統芸能の練習・披露等

・宿泊体験施設

農業体験が可能な林間学校、大学のサークル活動、アートイベント等

サポート施設がひとを呼び込み働き手や住まい手を生み出すことで、小学校としての復活を目指した案。

■案2 外部と内部の出会いの場

・長期滞在型 不登校の子供たちの学校。

学校を寄宿舎としても使用、授業の他農業体験やホームステイにより、自然に触れながら地域の人達との交流を図る。そうすることで、子供達の不登校を解消すると共に、この地区を第2の古里と感じてもらう。その結果、この地への若者の定住の可能性も出てくる。

・短期滞在型 宿泊施設

農業体験が可能な林間学校、大学のサークル活動、アートイベント等

地域サポート施設 ～清津の里～

4社 上杉隆 深谷しほ美 後藤芽衣 長井博美子 高村昌世
3年 伊高里正子 加藤えみ 加藤麻帆 清水郁 牧野佳代子 三枝良重寿 竹澤英

小出地区ヒアリング調査

●合併による問題点

- 以下のすべてが十日町中心部へ
 - ・子ども、高齢者の検診
 - ・会議等の集まり
 - ・役所での手続き

これらの問題点を改善し
地域サポートの拠点にする

●豪雪地帯

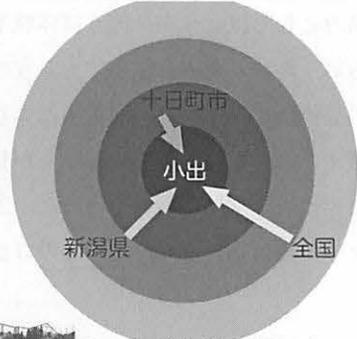
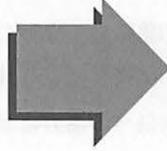
- 高齢者の雪下ろし
- 冬場の観光客の減少

●過疎・高齢化

- 若者・同世代がいなくて寂しい

●働く場所がない

- 農業以外に若者の働く場がない



清津峡小学校が
人々を集める拠点となる！

地域サポート施設としての使い方

●例1 農村体験交流施設 「田舎の学校きらら」～旧別俣小学校～

農業体験・農村体験をはじめ、さまざまなイベントが開催される田んぼの学校



▲市内唯一の本道校舎



▲おじいちゃん達とゴルフ



▲そらめん流し



▲大きな廊下でギャラリー



▲地元産物の販売

●例2 多機能型複合施設 「南風ん風」

1階：認知症デイサービスをはじめとする地域密着型の介護施設

介護相談や介護予防などの福祉サービス

2階：誰でも利用することができる会議室、調理実習室、パソコン室

絵本ギャラリーなど生涯学習や趣味の活動、ボランティアの支援

3階：自宅で暮らすことが困難になった高齢者を地域で支えるための住まい

誰もがシェフとなりお店を開くことができるレストラン



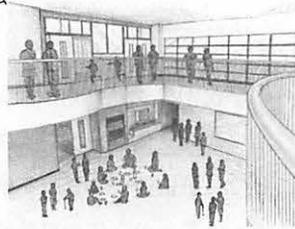
●「清津の里」の具体的な利用方法

○通常時

- ・地域住民の定期健診
- ・会議や飲み会などで集まる
- ・子育て支援
- ・伝統芸能の練習・披露

○イベント開催時、冬季

- ・大地の芸術祭やスキーなど
観光目的で訪れた人の宿泊施設
→周辺の温泉施設などと提携



- ・サポート施設での働き手が必要
- ・生活が便利になる
- ・子育てがしやすくなる
- 若者、子どもが増える

いずれは小学校として
甦らせよう！

案1 清津の里

外部と内部の出会いの場

4期 小待晴
5期 井上真以里
6期 草野真
7期 藤原志希
8期 藤原志希
9期 藤原志希
10期 中島裕子
11期 三輪加純美
12期 藤原真

住民の意見

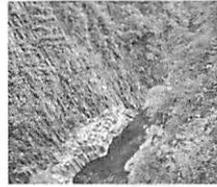
- ・若者が集まる場所になればいい
- ・学生のサマーキャンプに使えないか
- ・ギャラリーにしてしまうと地元の人が足を運ぶことはないし、交流が生まれない

現状

- ・地域内の繋がりは強い
- ・農業が主な仕事
- ・仕事に困っている訳ではない

問題点

- ・少子高齢化・過疎化
- ・若者が減少し活気がない
- ・農業の担い手が減少している



案1 長期滞在型

不登校の子どもたちの学校

- ・普段は学校に宿舍を設けて集団生活をする
- ・週末は周辺地域のお宅に泊まる
- ・体験入学
- ・農業や雪下ろしを通じて住民と関わる

プラス面

- ・第二の故郷として感じてもらう
- ・農業を若者に継承していく
- ・若者の力を借りて雪下ろし等重労働の負担軽減

マイナス面

- ・双方の心身ともに大きな負担になりやすい
- ・カウンセラーや地元の相談役が必要
- ・コミュニケーションをとるのに時間がかかる



北星学園余市高等学校



農業体験

案2 短期滞在型

宿泊施設

- ・紅葉・スキー・芸術祭にきた人達のため
- ・学生サークルなどの団体も泊まれる
- ・ゲストハウス
- ・雪下ろしボランティアの活動拠点
- ・農業体験、雪アート

プラス面

- ・学生が来ることで活気づく
- ・多世代が交流できる
- ・農業を若者に継承していく
- ・若者の力を借りて雪下ろし等重労働の負担軽減

マイナス面

- ・地元の人と直接関わる機会が少ない
- ・短期滞在のため一時的な活性化に過ぎない



月の沢龍神街道 スノーアートフェスティバル/大地の芸術祭



山形県月山志津温泉『雪旅籠の灯り』

案2 外部と内部の出会いの場

きよつのいえ

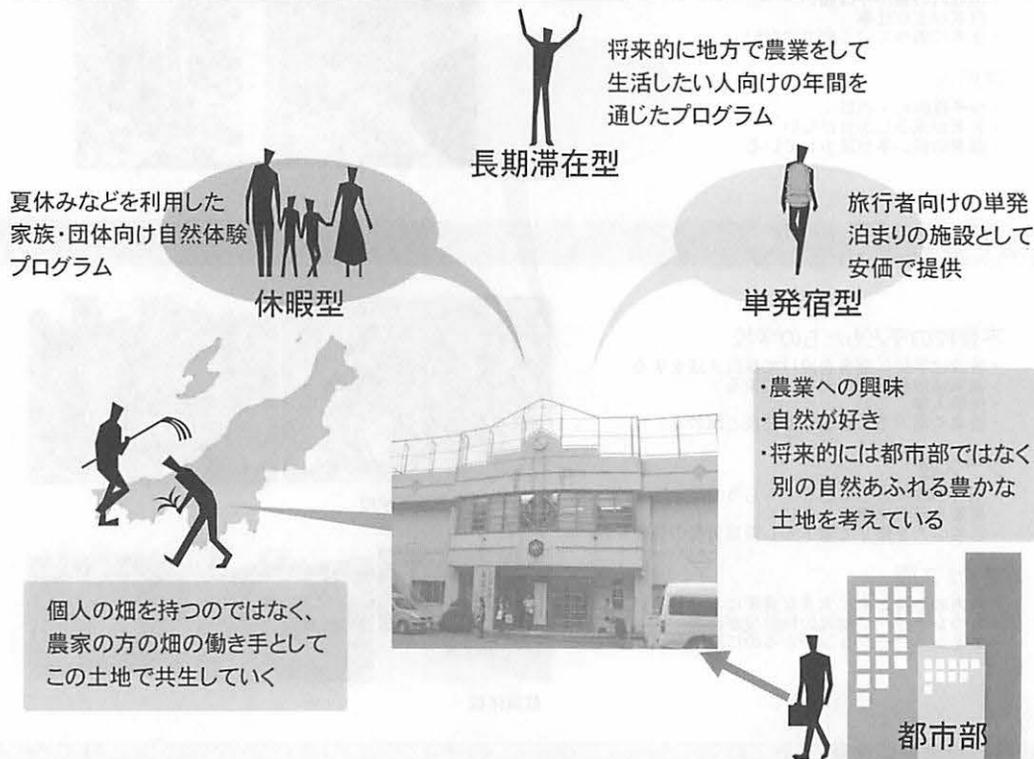


3年 新井結莉 石津舞 川上穂子 島田佳花 酒野かおり 栗山輝 吉岡愛未
4年 櫻見沙予 藤田真乃 宮澤志歩 西原友菜 藤本結愛子 島山知子

～長期滞在型村人になろう計画

若者がまちを出て行く現状を変えるには……？

人をこの地に留まらせるようなプランを考える!!



事例：宮城県 丸森町

『滞在型クライנגルテン』

丸森町では、農業を体験しながら丸森の自然に親しむ都市住人を受け入れ、地域住民との継続的な交流を行う拠点施設として「不動尊」と「筆甫（ひっぽ）」、2つの地区に「滞在型クライングルテン」を整備しました。



十日町市→雪まつり発祥の地
豪雪地帯という過酷なイメージ

↓
逆に特徴としてワークショップにいかす

■ワークショップ
雪とアート
足跡で絵を描こう!!
雪原をキャンパスに。

利雪
雪冷房システムで
新しい試み



■案3 きよつのいえ 長期滞在型 村人になろう計画

・長期滞在型クライנגルテン

将来地方で農業をして生活したい人達の年間を通したプログラム。

・休暇型

家族、団体向け自然体験プログラム。

運動場や後者前の広場を利用した野菜直売所の設置や、雪祭りやワークショップの開催。

地元の役に立つとともに、とにかく年間通して人にきてもらえ、それをきっかけとして若者が増える施設が良い。

そういうことから、冬の雪を利用したアートイベントによるひとの呼び込み、宿泊施設として学生を中心とした活動のサポート等の利用がとても良い。そして、多くの人達が利用することでこの地区の人口も増え、最終的には小学校として再生させたいとの意見だった。

第6章 最終案の作成及びプレゼンテーション

意見、要望を計画案にフィードバックし、改修のプログラムを作成した。そのプログラムを基に、小学校のコンバージョン案を計画した。

■清津峡小学校 小出デザインスクールプロジェクト

①地域環境をデザインする場をつくる

地域の人々は、冬の厳しい環境、冬以外の豊かな環境と様々な知恵によって共存しながら生きてきた。その知恵を再生し、自然環境自体を環境学習の場としてデザイン化する。地域全体をフィールドとした自然教室（雪室研究、エコハウジング、アースアート、カヌー、ビオトープ、エコキャンプなど）、林間学校、農業体験、雪まつり等を企画することで、この地区の素晴らしさや冬の厳しさを体験してもらうとともに、環境の時代における暮らしを自らデザインできる力を養ってもらう。

地域全体を学習の場とし、小学校をその活動の中心のデザインスクールセンター（研究室／スタジオ・キッチンスタジオ・土地の食材レストラン・宿泊施設）として改修する。

②生活をデザインする場をつくる

この地域は高齢化がますます進んでいる。しかしほとんどの住民がこの地を愛しているのが、アンケートからもわかる。高齢者は特に健康のサポートが重要である。何しろ元気であってこそ、生活が成り立つ。健康をサポートし、交流の場を設けることで地域の人たちの生活自体をデザインする場をつくる。

健康支援機能（健康相談室、リハビリ室、足湯など）として改修する。

このように様々な世代が交流可能な複合コミュニティ施設として活用していき、この施設を体験することで、この地区のこれらの活動に興味を持ち、居住したいと思う人たちを支援し、最終的に小学校として再利用することも視野に入れつつ、学びの場として使用し続けることを目指した。

■プレゼンテーションと今後の課題

今年は、妻有アートトリエンナーレの本番の年で、7月29日から9月17日に掛けて開催された。その期間に合わせて、小出の家で住民の方々を呼んで上記計画案のプレゼンテーションを行った。

住民お方々から下記の意見があった。

「ここは元々中里村という村。良い物を作って大切に使う習慣がある。伝統的に親方になった人がそういう心構えです。例えば、屋根にはステンレスを張って今は金が掛かっても次世代に金をかけないように。清津峡小学校の体育館もステンレス。十日町市は安かろう良かろう悪かろうで考え方が違う。今は合併して十日町市になっていますけど、中里村の施設は十日町市と比較しても一歩も二歩も引けを取らないと考えています。」

「環境的には申し分なく良い所にあるのにPRが全然足りていない、せっかく清津峡温泉、溪谷を初めとする豊かな自然があるのに来る人は清津峡に行くだけで帰ってしまう。小出のもっと上に上るわけでもなく、川に下りて遊ぶでもなく。溪谷も奇麗だけど、上に上がると秋の黄金色の稲穂が奇麗だし、ブナの並木もあって奇麗だし、棚田も奇麗。清津峡に行く途中で道が広がっている所の脇に今は通れなくなっている旧トンネルがあるんだけど、ここを通ると川も近くて溪谷の岩も近くで見れて奇麗。そこが通れなくなっているのは勿体ないって言っているんだけど危ないからそうなってしまうている。環境資源として使えないか。」

「魅力のある場所がいっぱいあるから色々な体験ができたり見たりできると思う。例えばスキー、スノーモービル、魚釣り、川下り、田植え体験、ジャガイモ掘り、せっかくグランドがあるからテニスとか、トンネル通ったり、清津川で泳ぐ、瀬戸溪谷：通称せとうち、清津峡の上に上っていくと変わったダムがある、こういう魅力ある場所を見て回れるハイキングコース」

「皆、魅力ある場所があるのに知らない。インフォメーション、PRする場所もない。市もメジャーな清津峡位しかPRしていない。」

「地元の人も地元の食材などの価値を知っていない。地元のを来てくれた人に食べてもらいたい。一步松之山に行くと凄い。どの旅館も地元の食材を使って協力してやっている。やっぱりリーダーがいないと。」

「折角ある資源が眠ってしまっている。中里資源マップを作ると良いと思う。」

「専業農家は一軒しかなくて、後は皆兼業農家で他に仕事を持っている。頼めば体験学習などに協力してくれる方はいると思う。土日とか。一年の中で忙しくない時とか。」

「地域活性化となると若い人、新しい人が来てもらわないと年寄りの施設だけだと続かない。」

「周りの環境も良いし、清津峡小学校は申し分ない老人施設になると思う。」

この様な意見から、地域の人の環境を愛し、清津峡小学校にも愛着があるのがよくわかった。その地域の豊かな環境と建築を生かし、環境を体験してもらい、地域だけでなく他の地域から定期的に人が訪れ活動できる場が求められていることがよくわかった。また、地域活性化となる新しい若い人が活動でき地域に活性化を与えることが望まれている反面、高齢化をサポートする老人施設も同時に求められている。

前記の意見については、今回の案は対応していると思うが、後記の意見について対応していない。今回提案した案は、あくまでも一つの解答でしかない。今回の地域の方々の意見を参考にさらなる提案をしていきたいと思う。

文献

- ・「コンバージョンによる都市再生」建物のコンバージョンによる都市空間有効活用技術研究会／日刊建設通信新聞社／2002年
- ・「コンバージョン、SOHOによる地域再生」小林重敬編著／学芸出版社／2005年
- ・「コンバージョン [計画・設計] マニュアル」松村秀一監修／エクスナレッジムック／2004年
- ・「世界のコンバージョン建築」小林克弘、三田村哲哉、橘高義典、烏海基樹／鹿島出版会／2008年
- ・「建築設計資料98用途変更」建築思潮研究所・編／建築資料研究社／2004年

調査及び計画協力

共立女子大学 家政学部 建築・デザイン学科

助手 相澤まゆら

学生 堀ゼミナール

上杉 唯、後藤芽衣、新藤さとみ、関美沙子、高村尚世、鶴田紫乃、長井香菜子、西部友里、藤本絵里子、御園生沙織、四元まりえ、桑原しほ美、小幡 碧、北村美都穂、野澤可南子

新井絵莉、石津 瞳、伊藤里恵子、加藤えみ、加藤麻帆、川上菫子、草薙 薫、國沢奈布、島田佳苗、清水 郁、関屋亜美、中島雅子、浜野かおり、三坂満里奈、三輪知穂美、吉田奈央、徳山 瞳、吉岡愛未



■企画案

① 地域環境をデザインする

地域の人が自然環境と共生しながら生きてきた知恵を再生し、自然環境自体を環境学習の場としてデザイン化する。地域全体をフィールドとした自然教室（エコハウジング、アースアート、カーナー）、林間学校、農業体験、雪まつり等を企画することで、この地区の高齢らしさや冬の厳しさを体験してもらうとともに環境の時代の暮らしを自らデザインする。

→地域全体が学習の場

(デザインスクールセンター)

- ・ 研究室/スタジオ
- ・ キッチンスタジオ
- ・ 土地の食材レストラン
- ・ 宿泊機能

② 生活をデザインする

高齢化に対応して健康をサポートし、交流する場を設けることで地域の人々の生活をデザインする。

→健康支援機能

- ・ 健康相談室
- ・ リハビリ室

このように様々な世代が交流可能な複合コミュニティ施設として活用していく。この地区のこれらの活動に興味を持ち、居住したいと思う人達を支援し、最終的には小学校として再利用することも視野に入れつつ、学びの場として使用し続けることを目指す。

■利用法

①健康支援施設（1階）

(目的) 高齢者の増という現状に対し、地域環境を整え、暮らしを良くするとともに交流の場を提供することで生活をデザインしてもらう。

(対象) 地域住民

(機能)

- ・ 健康相談所
看護師に来てもらい、地域の住民が健康状態を相談したり、病院を紹介してもらったりする。
- ・ 健康診断器具及び軽度のアスレチック器具の設置
血圧計等の健康診断器具を設置する事で、日常的に住民が健康状態を知る事が出来ると共に、健康維持及び増進をはかる。
定期健康診断の時にも利用する。

②宿泊施設（2階）

(目的) 地域全体を地域の知恵を生かした学習の場=小出デザインスクールとし、県内外からの認知度を高め、地域に親しみを持ってもらうと共に、定住のきっかけをつくる

(対象) 小中高の学校団体、ボーイスカウト、子供会、大学サークル

(機能)

- ・ 農業体験
田植えを行ったり、住民の方の畑仕事を手伝ったりする
- ・ 雪の利用
雪遊び研究 (自然冷感庫)
- ・ かまくら宿泊体験
冬期は外にかまくらを作り、楽しんでもらう
- ・ エコハウジング
地場の材料や環境を利用した小櫃づくり
- ・ アースアート
紙すき、染色、陶芸、土木石の造形、生活家具づくり
- ・ 廃屋利用のアート作品
- ・ 自然温風等の体験

これらの施設を元に、様々なイベントを企画し、多世代交流の場として利用する。小学校の吹き抜けを活かしたイベント (講演会 / 音楽会等) を企画するなどして、様々な交流を生み出したい。
ピロティを一部温風として利用することも検討する。



■イベント企画

夏: 渡し舟めぐり・アースアート・エコハウジング・カーナー体験

秋: 焼き芋大会・アースアート・エコハウジング・カーナー体験

冬: 竹スキー、雪の滑り台、足湯 (かまくらで)、アートイベント

体育館: 球技大会、かるた大会 (小出かるた)、肝試し、しっぽとり etc...

ピロティ: バーベキュー、足湯

■事例

(てくてく (新潟県長岡市))

人々が自由に選べる公園と子育ての駅がひとつになった全国初の施設。緑が広がる2万平方メートルの公園の中には、季節や天候に関わらず過ごせる屋内広場がある。

施設内では、年間を通して様々なイベントが行われている。

更に保育園 (一時保育) が併設されている。

対象者: 生後6か月から就学前の児童

時間: 最長8時間まで

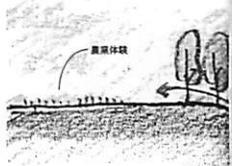
料金: 1時間300円 (30分150円)

(地球デザインスクール)

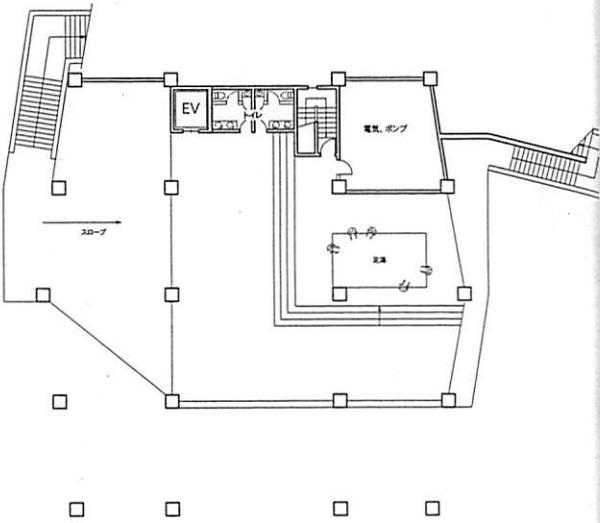
140haの里山を利用した施設

廃校を研究所の拠点として利用

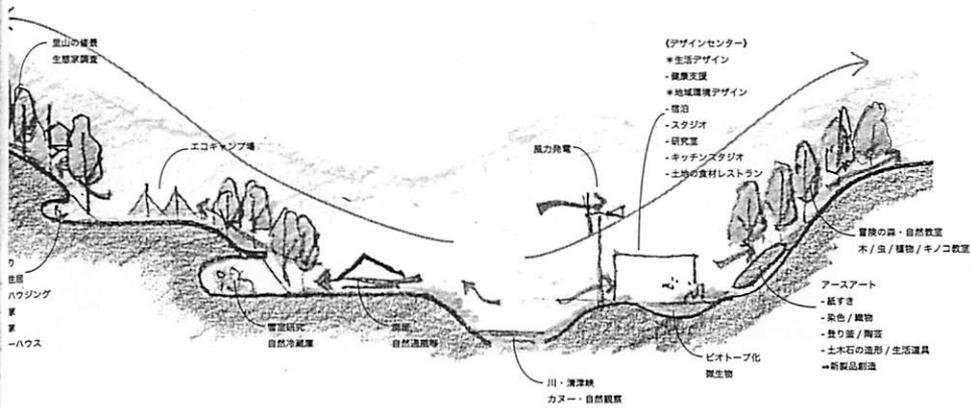
里山で暮らしながら様々な知恵を再生し里山全体を環境学習の場としている



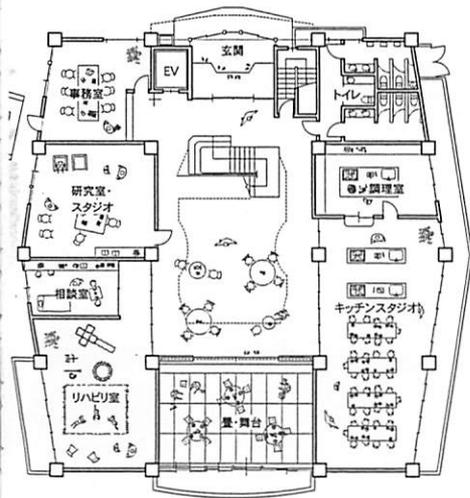
穴組
穴各
エコ
木の
土の
ツリ



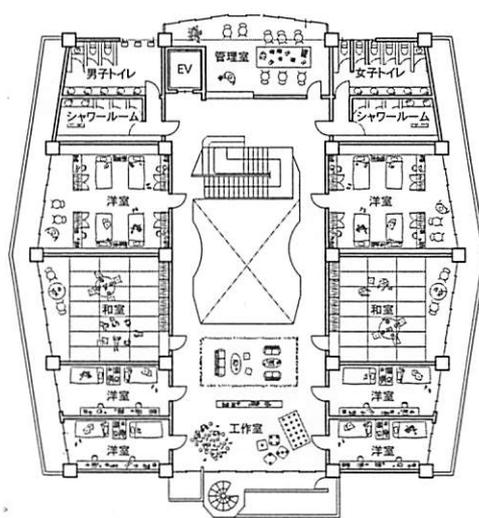
地下平面図 S=1/100



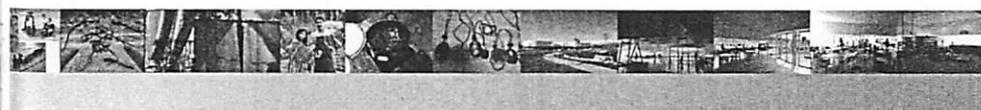
小出デザインスクール イメージ図



1階平面図 S=1/100

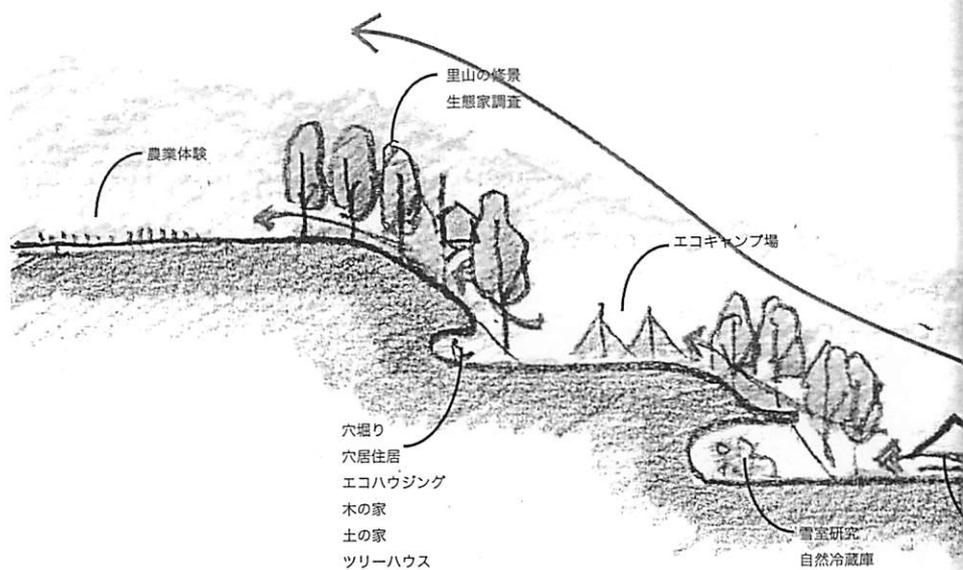


2階平面図 S=1/100

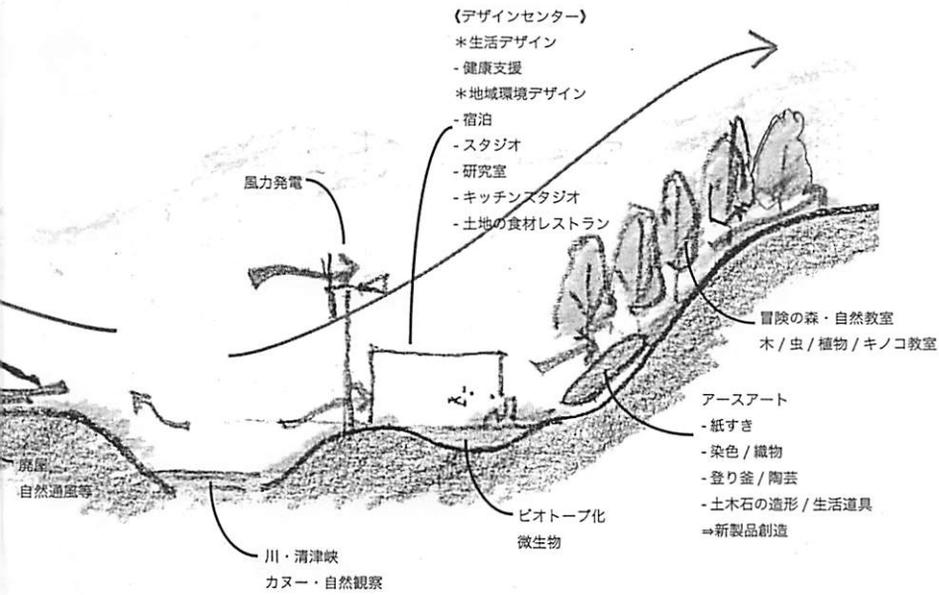


計画案

過疎地における廃校利用による地域おこしとコミュニティ形成について

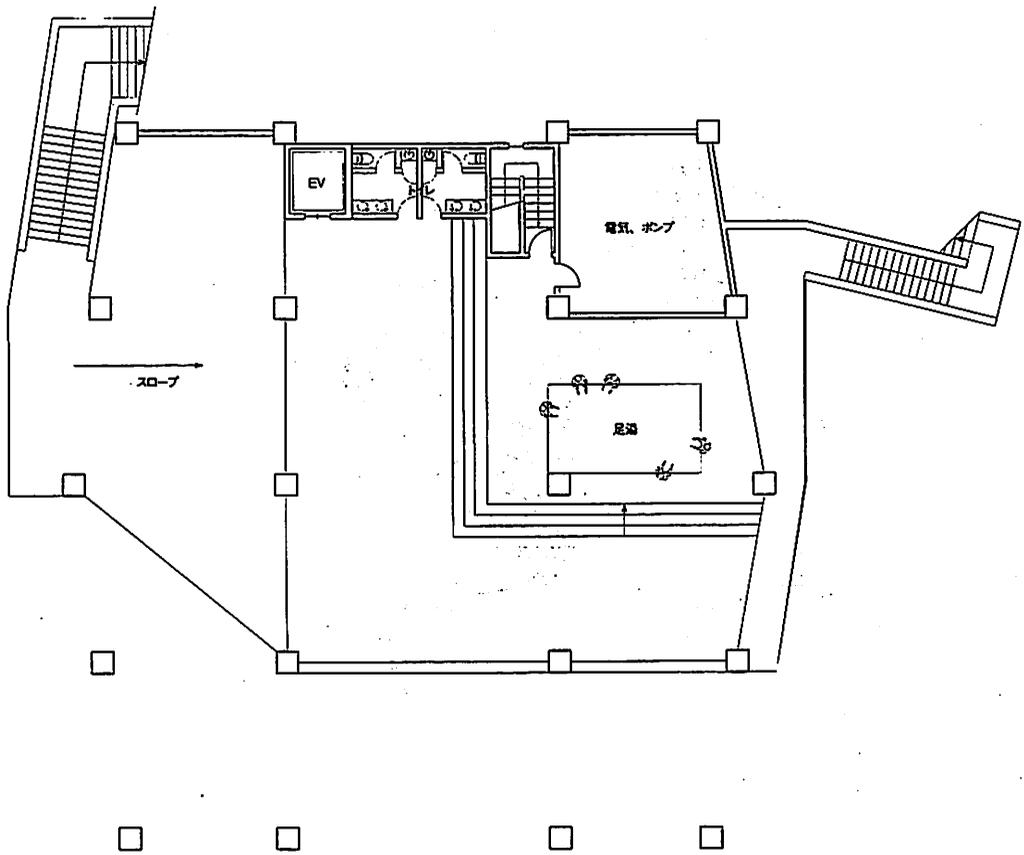


小出デザインスクール

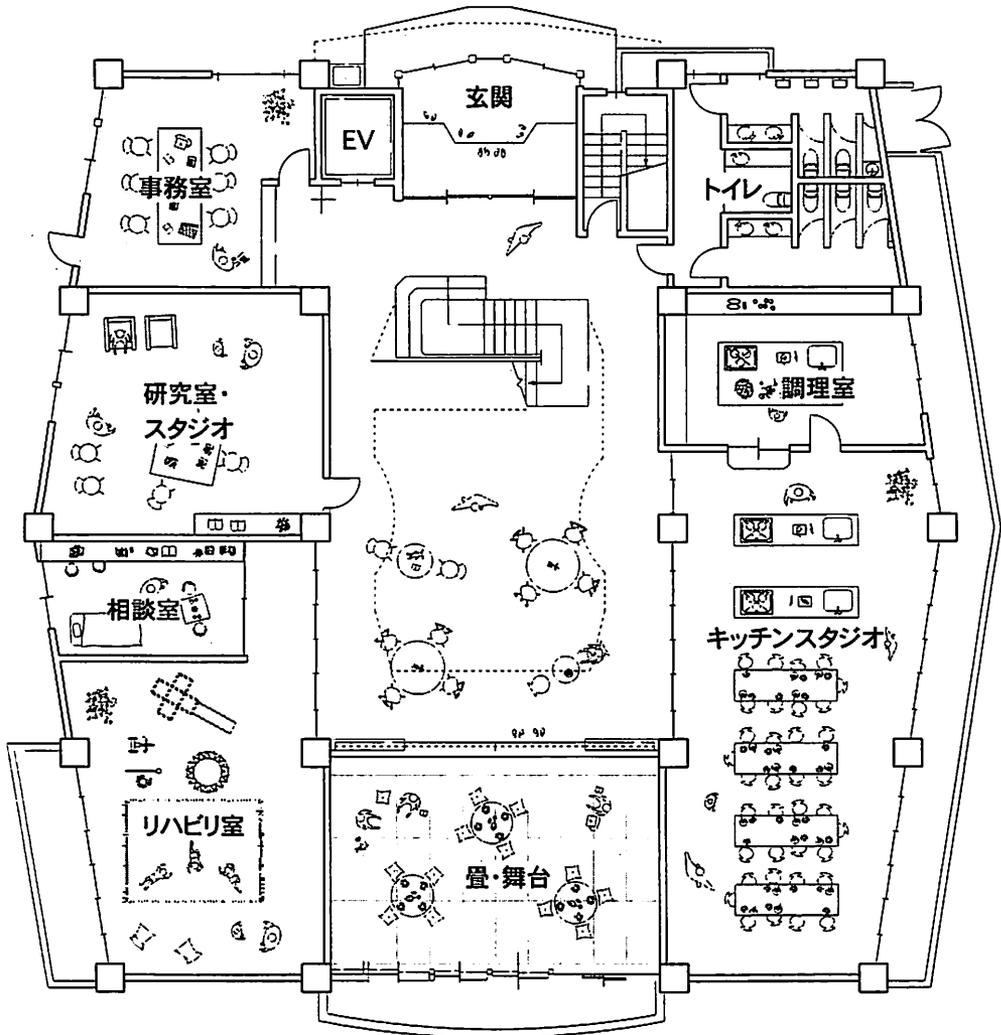


イメージ図

過疎地における廃校利用による地域おこしとコミュニティ形成について

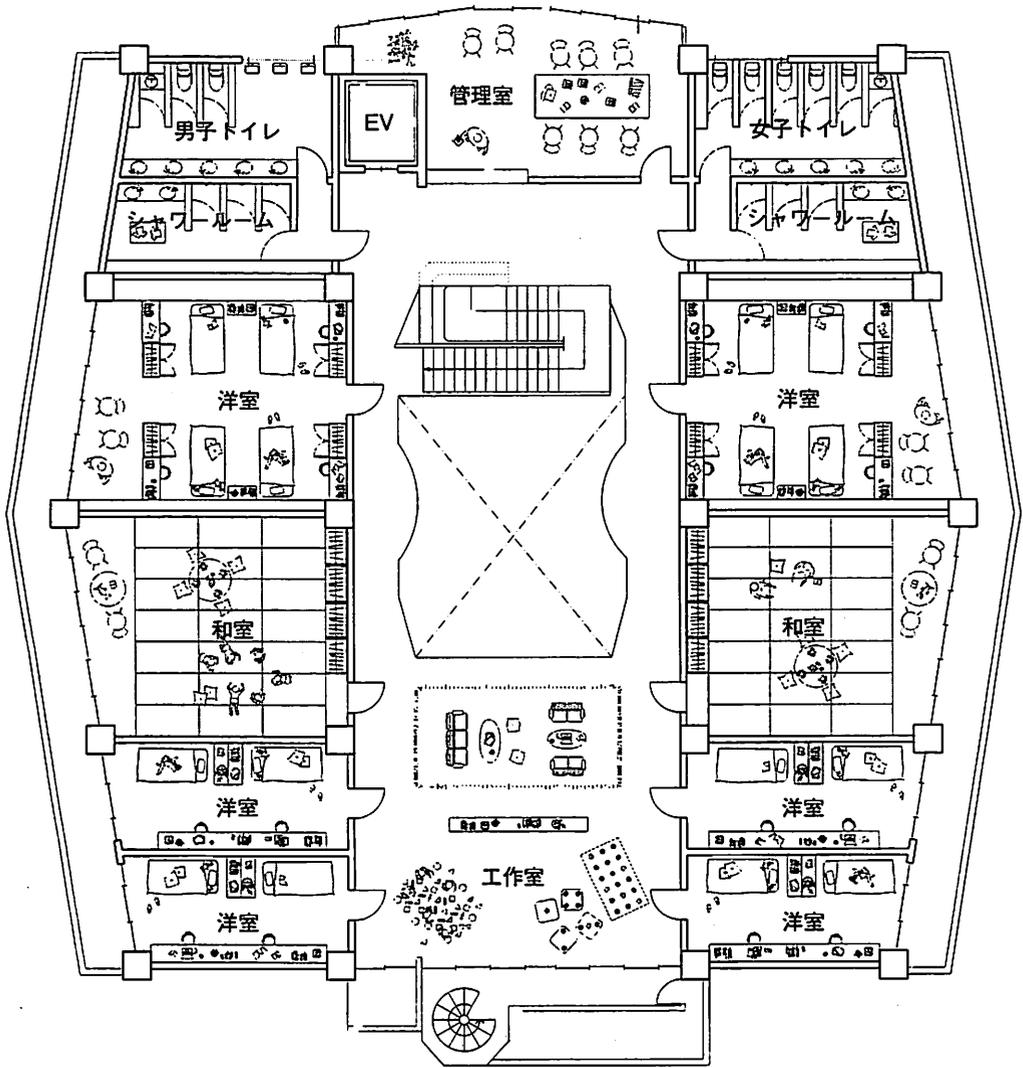


地下1階平面図（ノンスケール）



1階平面図 (ノンスケール)

過疎地における廃校利用による地域おこしとコミュニティ形成について



2階平面図 (ノンスケール)